

令和 2 年 6 月 18 日現在

機関番号：82609

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2019

課題番号：16K13499

研究課題名（和文）当事者主導研究による精神病性疾患当事者の主観的ウェルビーイング回復過程の解明

研究課題名（英文）Recovery process of subjective wellbeing among people with psychosis and severe mental illness: user-led approach

研究代表者

山崎 修道 (YAMASAKI, Syudo)

公益財団法人東京都医学総合研究所・精神行動医学研究分野・主席研究員

研究者番号：10447401

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,500,000円

研究成果の概要（和文）：精神病性疾患からの回復（recovery）には、地域生活の中で、当事者の主観的なウェルビーイングを高めることが不可欠である。当事者主導研究（User-led study）は、精神疾患を経験した当事者の主観的ウェルビーイングの回復過程を明らかにする有力な方法だが、世界的にも少なく、我が国では皆無である。本研究では、精神疾患を経験した当事者を中心とした研究チームを組織し、地域の中で当事者が主観的なウェルビーイングを回復する過程を、当事者主導で明らかにすることを試みた。当事者の回復の阻害要因と促進要因に着目したモデルを質的データを元に作成し、それぞれ国際誌、国内誌に発表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は当事者との共同創造（コプロダクション）により精神疾患からの回復プロセスを明らかにしようとした世界的にも数少ない研究である。本研究の結果から、精神疾患当事者の回復を後押しし、妨げないようにするためには、当事者を取り巻く組織の環境や文化、社会の構造を変革していく必要があることが示唆された。研究のプロセスだけでなく、社会変革のプロセスにおいても、当事者との共同創造が不可欠であることが示唆された。本研究は、学術的意義のみならず、我が国において当事者とのコプロダクションによる研究を今後推進していくためのネットワーク構築を進めていく足掛かりとしても重要な意義を持つと言える。

研究成果の概要（英文）：To recover from psychotic disorders and severe mental illness, it is essential to promote the subjective well-being of the people in the community. A user-led study is a significant study process to clarify the recovery process of subjective well-being of a person who has experienced mental illness. However, there is no previous study in Japan, even a few previous studies in the world. In this study, we attempted to (1) organize a research team with those who experienced mental illness as core members of the team, and (2) clarify the recovery process of subjective well-being by user-led approach. We described models focusing on inhibitory and promoting factors for the recovery based on qualitative data. We published the models in the scientific and clinical journals.

研究分野：臨床心理学，コミュニティ心理学

キーワード：精神病性疾患 重度精神疾患 ウェルビーイング リカバリー コミュニティ

1. 研究開始当初の背景

精神病性疾患 (psychosis) に代表される重度精神疾患 (Severe mental illness) は、主に思春期に発症し、人生の発達課題 (就労・自立・結婚) 達成に大きな障害となる。精神病性疾患や重度精神疾患からの回復 (recovery) には、症状軽減と同時に、主観的ウェルビーイングを高めることが不可欠である (Slade, 2010)。しかし、どのようなプロセスを経て、当事者の主観的ウェルビーイングが回復するのか、実証されていない。ウェルビーイングの回復は主観的なプロセスであるため、当事者の語りからモデルを抽出する質的研究と、抽出したモデルを実証する量的研究を相補的に用いることが必要である。また、精神疾患を経験した当事者の本質的な語りを引き出すために、当事者主導で進める研究プロジェクト (当事者主導研究: User-led study) が必要である。

当事者と研究者が協働し、科学的な方法論に則って研究を進める当事者主導研究は、2000年代後半から英国で始まり (Pitt et al. 2007, Byrne and Morrison 2010)、最先端の医学研究でも重視されている (Lloyd and White 2011 Nature)。当事者自身が、研究デザイン・データ収集から一貫して研究に関わるため、当事者の貴重な語りを引き出すことが出来る。また、得られたデータから、本質的な考察とモデル構築が出来る。

当事者主導研究 (User-led study) は、精神疾患を経験した当事者の主観的ウェルビーイングの回復過程を明らかにする有力な方法だが、世界的にも少なく、我が国では皆無である。我が国では、当事者主導の地域実践が各地で普及しつつある (小林・向谷地 2013 等) が、国際水準の User-led study は未だ行われていない。研究代表者は、これまで臨床心理学的地域援助活動として、当事者主導の社会復帰実践 (山崎 2009) や、当事者・専門家・行政・市民の協働によるコミュニティ活動 (こころの健康政策構想会議・こころの健康を考える世田谷区民会議: 山崎 2014) の豊富な経験を持つ。

2. 研究の目的

本研究では、研究代表者のこれまでの経験を活かし、我が国初の User-led study を行うことで、我が国の臨床心理学研究を国際水準に高めることを目標とした。具体的には、精神疾患を経験した当事者を中心とした研究チームを組織し、地域の中で当事者が主観的ウェルビーイングを回復する過程を、当事者主導で明らかにすることを試みた。

3. 研究の方法

当事者主導研究チームを編成し、精神病性疾患や重度精神疾患などの精神疾患を経験した当事者が、主観的ウェルビーイングを回復する過程を質的データから明らかにした。その上で、主観的ウェルビーイング回復を促進する要因を同定し、量的研究の基盤となるウェルビーイング回復プロセスのモデル化を図った。

当事者主導研究チームによる、ウェルビーイング回復プロセスのモデル化

精神疾患を経験した当事者の主観的な回復過程とウェルビーイングに至るプロセスの要素を抽出し、モデル化するために、フォーカスグループインタビューと質的データの分析を行った。仮説生成 データ収集 モデル化 データ再収集 モデルの精緻化を行うため、フォーカスグループインタビューの項目作成及び当事者主導研究チーム内で、ディスカッションと作業仮説の構築を行った。当事者へのフォーカスグループインタビューでは、User-led study の手続きに則り、研究チームに所属する精神疾患当事者がインタビュアー・ファシリテーターとなり、当事者が自らの体験を語る事が可能な環境の下で実施した。

研究成果及びコミュニティでの実践研究成果発表

の結果をコミュニティに周知し、研究に対する市民からの幅広い意見を収集するために、シンポジウムでの発表を行った。研究結果を国際学会での発表及び国際誌への投稿を通じて公表した。ワークショップを継続し、本研究そのもののプロセスを実践報告としてまとめ、学術誌・メディア等で広く周知した。

4. 研究成果

【初年度】初年度は、当事者主導研究チームを組織すること、フォーカスグループインタビュー実施に当たって、当事者主導研究チームでのディスカッションを通じて仮説モデルを生成すること、当事者をパネリストとするシンポジウム及びグループディスカッションを実施し、コミュニティにおける当事者のナラティブデータを収集すること、以上の3点を進めた。全5回の当事者主導研究チームによる研究セミナーを実施し、精神病及び重度精神疾患を経験した当事者のリカバリーの過程を当事者主導でモデル化した。また、精神病性疾患を持つ当事者の身体的健康の回復に関するシンポジウムを開催し、ピアカウンセラーによる進行のもと、3名の当事者パネリストから回復過程に関するナラティブを得ることが出来た。収集したデータを質的に分析し、論文化を進めた。

【2年目】初年度に引き続き、当事者主導研究チームを継続し、フォーカスグループインタビューを順次実施し、生成した仮説モデルを精緻化した。また、回復過程モデルについて、シンポジウムで公表し、論文化を進めた。精神疾患当事者2名を含む当事者主導研究チームにより、フォーカスグループインタビュー及びディスカッションを計12回実施した。その過程で、精神疾患当事者を含むチームでのディスカッションを通じて、仮説モデルの精緻化を進め、回復促進要因に着目したモデル及び回復阻害要因に焦点を当てたプロセスモデルを作成した。回復促進要因に着目したモデルについては、当事者研究シンポジウムにて発表した。回復阻害要因に着目したモデルについては、フォーカスグループインタビューの結果を踏まえ、国際誌への投稿準備を進めた。当事者の主観的ウェルビーイングと密接に関連する身体的健康を推進する上では、精神疾患への支援やサービスにおいて、当事者の自律性を損なわず、エンパワメントを可能にする組織や社会の構造が必要であることが示唆された。

【3年目・4年目】引き続き当初計画に基づいて研究を進め、昨年度までに実施したフォーカスグループインタビューを通じて生成した仮説モデルの精緻化、回復過程モデルの公表と論文化、回復過程モデルを基にした量的研究へ向けた基盤作り、以上の3点を進めた。昨年度までに精神疾患当事者を含むチームでのディスカッションを通じて、仮説モデルの精緻化を進め、回復促進・阻害要因のうち、当事者を取り巻く社会や組織の環境や文化、社会構造が重要なポイントであることが示唆された。このモデルについては、リカバリーモデルに精通する国際的なエキスパートからアドバイスを受けた上で、質的研究として論文化した。論文化はほぼ完了しており、間もなく国際誌に投稿予定である。

回復促進要因に着目したモデルについては、当事者との共同研究の成果として国内誌に発表した。回復阻害要因に着目したモデルについては、フォーカスグループインタビューの結果を踏まえてまとめ、国際誌へ投稿し、受理された(Nakanishi et al 2019 BJPsych Open)。また、国際学会で発表を行った。回復過程モデルを基にした量的研究については、リカバリーモデルの国際的エキスパートであるジェフ・シェパード氏を招聘し、リカバリーを測定するためのアウトカム指標とリカバリーを促進する上で組織の環境における影響要因についてアドバイスを受け、量的研究を行う上での評価ツールを再検討した。

考察と今後の展望

本研究は当事者との共同創造(コプロダクション)により精神疾患からの回復プロセスを明らかにしようとした世界的にも数少ない研究である。本研究の結果から、精神疾患当事者の回復を後押しし、妨げないようにするためには、当事者を取り巻く組織の環境や文化、社会の構造を変革していく必要があることが示唆された。研究のプロセスだけでなく、社会変革のプロセスにおいても、当事者との共同創造が不可欠であることが示唆された。本研究は、学術的意義のみならず、我が国において当事者とのコプロダクションによる研究を今後推進していくためのネットワーク構築を進めていく足掛かりとしても重要な意義を持つと言える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Nakanishi M, Tanaka S, Kurokawa G, Ando S, Yamasaki S, Fukuda M, Takahashi K, Kojima T, Nishida A	4. 巻 5
2. 論文標題 Inhibited autonomy for promoting physical health: qualitative analysis of narratives from persons living with severe mental illness	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 BJPsych Open	6. 最初と最後の頁 e10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) https://doi.org/10.1192/bjo.2018.77	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Morimoto Y*, Yamasaki S*, Ando S, Koike S, Fujikawa S, Kanata S, Endo K, Nakanishi M, Hatch SL, Richards M, Kasai K, Hiraiwa-Hasegawa M, Nishida A (*equal contribution)	4. 巻 8
2. 論文標題 Purpose in life and tobacco use among community-dwelling mothers of early adolescents	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 BMJ Open	6. 最初と最後の頁 e020586 ~ e020586
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) http://dx.doi.org/10.1136/bmjopen-2017-020586	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 田中慎太郎, 黒川常治, 山崎修道	4. 巻 増刊9号
2. 論文標題 当事者主導研究 User-led studyの動向と未来について	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 臨床心理学	6. 最初と最後の頁 169 ~ 173
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山崎修道	4. 巻 31増刊号
2. 論文標題 統合失調症の認知行動療法 概要・現状と課題について	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 精神科治療学	6. 最初と最後の頁 234-238
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Yamasaki S
2. 発表標題 Process of personal recovery and well-being from the conceptual framework of personalized value [シンポジウム座長]
3. 学会等名 International Symposium on Adolescent Health and Personalized Value (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山崎修道
2. 発表標題 精神保健サービスにおけるユーザー・リサーチャーの世界的動向～コ・プロダクションと当事者主導研究～
3. 学会等名 インクルーシブ・デザイン・ラボプロジェクト キックオフ・シンポジウム (招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 山崎修道
2. 発表標題 当事者主導研究-User-led studyの動向と未来について
3. 学会等名 『みんなの当事者研究』 出版記念シンポジウム (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Nakanishi M, Kurokawa G, Yamasaki S, Nishida A
2. 発表標題 Autonomy in physical health among people living with severe mental illness
3. 学会等名 5th European Conference on Integrated Care and Assertive Outreach (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 山崎修道	4. 発行年 2018年
2. 出版社 金剛出版	5. 総ページ数 272
3. 書名 予防・早期の対応を可能にするシステムづくり 英国のシステムと東京都世田谷区の挑戦（病棟に頼らない地域精神医療論 精神障害者の生きる力をサポートする [伊藤順一郎監修 小林茂・佐藤さやか編]）	

1. 著者名 山崎修道	4. 発行年 2019年
2. 出版社 文光堂	5. 総ページ数 896
3. 書名 4. 危機介入（公認心理師技法ガイド 臨床の場で役立つ実践のすべて [下山晴彦・伊藤絵美・黒田美保・鈴木伸一・松田修編] 第4章 コミュニティ・アプローチ技法）	

1. 著者名 山崎修道	4. 発行年 2019年
2. 出版社 文光堂	5. 総ページ数 896
3. 書名 8. 予防啓発（公認心理師技法ガイド 臨床の場で役立つ実践のすべて [下山晴彦・伊藤絵美・黒田美保・鈴木伸一・松田修編] 第4章 コミュニティ・アプローチ技法）	

1. 著者名 山崎修道	4. 発行年 2019年
2. 出版社 文光堂	5. 総ページ数 896
3. 書名 10. 政策立案（公認心理師技法ガイド 臨床の場で役立つ実践のすべて [下山晴彦・伊藤絵美・黒田美保・鈴木伸一・松田修編] 第4章 コミュニティ・アプローチ技法）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

公益財団法人 東京都医学総合研究所 社会健康医学研究センター 心の健康ユニット ウェブサイト
<https://mentalhealth-unit.jp/>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
連携研究者	向谷地 生良 (MUKAIYACHI Ikuyoshi) (00364266)	北海道医療大学・看護福祉学部・教授 (30110)	
連携研究者	西田 淳志 (NISHIDA Atsushi) (20510598)	公益財団法人・精神行動医学研究分野・プロジェクトリーダー (82609)	
連携研究者	石原 孝二 (ISHIHARA Koji) (30291991)	東京大学・総合文化研究科・教授 (12601)	
連携研究者	石垣 琢磨 (ISHIGAKI Takuma) (70323920)	東京大学・総合文化研究科・教授 (12601)	
連携研究者	笠井 清登 (KASAI Kiyoto) (80322056)	東京大学・医学部附属病院・教授 (12601)	